（第3種郵便物認可）

読売 俳壇

矢島 渚男 選

春惜しむ信用組合外務員　名取市　里村　直

【評】信用組合制度は零細な資金を集め中小企業や消費者に融資する福祉政策の一環で十九世紀最後の年に制度化された。外務員の外歩きが仕事の中心で、景色もよく見えるし「春惜しむ」の季語が利いている。

孫が孫抱く頃桜咲くだろか　川崎市　小沢寿美子

【評】いま、人類にはさまざまな問題が噴き出して存続が心配になってきた。果たして私たちの孫は玄孫を抱いて桜を見ることが出来るのか不安になってくる。

串のもの買ってうれしき桜かな　神奈川県　石原美枝子

【評】ダンゴかな？　おでんかな？　串ものは懐かしいですね。

二反八畝耕す父祖の苦を継ぎて　神戸市　大浜　義弘

民主主義のゲームオーバー花吹雪　東京都　奥村　和子

行く春や停戦どこも難しく　宇都宮市　大門とよ子

花を撮るライカの波郷しのびつつ　越谷市　安居院半樹

蕨摘み孫はドローンの操縦士　佐賀市　木浦　善徳

今一度見たき祖国の桜かな　ソウル　平井たけし

すみれ野や腰をかがめて転びけり　東京都　古川　光子

高野ムツオ 選

磐座に降りくる神に囀れる　宗像市　泉　勝明

【評】磐座は神の依代、神そのものでもある。巨石信仰は古墳時代に遡ることができるらしい。空から舞い降りる春の女神を讃えて小鳥が囀る。原初よりの生命讃歌である。

縁日を日がな見てゐる風車　霧島市　内村としお

【評】風車を見ているのではなく、風車が春祭の人々を見ているのだ。時々回るのを止めて休み休みしながら。退屈そうな風車が可笑しい。

ふはふはの子猫ぐにやぐにや抱き上げる　北見市　藤沢　直美

【評】生まれたての子猫。予想以上に柔かかった。「ふはふは」「ぐにやぐにや」の擬態語から、その驚きが子猫の命の危うさとともに伝わる。

笊のぞき合うて又散る潮干狩　泉佐野市　布野　寿

山越えて山焼の音遠ざかる　東京都　望月　清彦

花衣とてエプロンをはずすのみ　藤沢市　井上　和子

花冷や亡夫の紫煙の円が浮く　東京都　鈴木　淑枝

盲いても目交いに咲く里桜　尼崎市　河野　福子

つい歩く動く歩道や春の午後　東京都　森　一平

引波のひかり追いかけ搗布曳く　日立市　菊池　風峰

正木ゆう子 選

走り出す癖そのままに入学す　堺市　椋本　望生

【評】嬉しくて、楽しくて、何時もつい走り出してしまう子ども。入学の朝も、そんなふうに家を出発したのだろう。いつまで子供子供していられるか。今だけの可愛い姿。

さまざまな花びら踏んで卒業す　上尾市　中野　博夫

【評】卒業式のころ咲く花々を想像しつつ、同時に、花びらを体験の比喩として解釈してもいい。さまざまな体験をした六年（三年）間だった。

纍纍と咲いてひかりの木五倍子かな　町田市　枝沢　聖文

【評】淡黄の小花が穂状に垂れ下がるキブシ。「纍纍」は同じものが連なるさまだが、その画数の多さが、たくさんの小花を思わせて面白い。

大山火事の禍を鎮めんと竜天に　秋田市　進藤　利文

桜いま青ざめてゐるワシントン　さいたま市　関根　道豊

甲斐駒を背に流れ来る花の雲　甲府市　志村か乃子

どの家も三極咲きて漉屋見ず　宝塚市　広田　祝世

切りてすぐ爪のびはじむ彼岸かな　宇陀市　泉尾　武則

鳥雲や山は大きな道しるべ　山形市　栗原ただし

伏せをして桜の下の犬静か　東京都　中島　徒雁

小澤 實 選

霾天や火山灰をも巻き込まむ　和歌山市　針谷　国光

【評】モンゴルや中国北部の黄土地帯から巻き上がった砂塵が、海を越えてやってくる。加えて、火山灰までも巻き込もうとしているという。まことに不穏である。

雪解けし畑矢じりを拾ひけり　横浜市　佐藤　祐一

【評】雪が解けきった畑の表面で矢じりを見つけ拾いあげた。雪が解けた喜びをうまくかたちにしている。古代人も暮らしていた地である。

十和田湖の深き入江の桜かな　弘前市　長利　冬道

【評】青森と秋田の県境にある十和田湖、その湖は美林に囲まれている。その深く入り込んだ入江に咲く、山桜である。人の気配はない。

夜見ヶ浜人の顎骨つちふれり　京田辺市　加藤　草児

交番に塵取り燕の糞受けに　川口市　高橋まさお

チーズパンのチーズ糸引く遅日かな　川崎市　西　順子

赤ちゃんの大きおならや水温む　伊勢市　藤田ゆきまち

雨の日は雨の鳥ゐる春の川　大野城市　野分　のわ

愉しみは行者にんにく野に遊ぶ　尾張旭市　小野　薫

ピザ分けて二人のランチスイートピー　神戸市　山口　誠

枝しおり折

坂井修一著『鷗外の甍』「鷗外守」（20首）で昨年、短歌研究賞を受けた著者は、森鷗外ゆかりの東京大学付属図書館長も務めた。明治以来の詩歌人の系譜を意識して詠んだ507首。〈ちりあくた舞ふうつしよの昼の鐘帰りなむいざ鷗外文庫〉

（短歌研究社、3300円）

神野紗希著『アマネクハイク』若手俳人のホープによるエッセー集。名句や自句にも触れながら日常の中で感じた思いをつづっている。何げない瞬間瞬間を捉える俳句のエッセンスに触れられる。

（春陽堂書店、1980円）

◆第69回現代歌人協会賞＝金田光世『遠浅の空』（青磁社）、久永草太『命の部首』（本阿弥書店）

◆第23回前川佐美雄賞＝加古陽『夜明けのニュースデスク』（ながらみ書房）

◆第33回ながらみ書房出版賞＝藤澤幸男『はる』（ながらみ書房）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭